

## 前回までのあらすじ

〈ヒナミ総力戦〉から一夜が明け、オオミヤ・シテイに帰還した作戦参加者は、関係各位に向けた報告会へと赴いた。其処で『帰還組』は、中央政府側から提出された記録映像により、撤退後のアヤカ・シュバイツァーとサクヤヒメの戦闘の結末を知る。街を覆うほどの爆轟に、彼等はサクヤヒメ——つまり〈ステインガー〉の脅威は去ったと確信していた。そして事態の速やかな収束と秩序維持のため、二つの案を提示した。

ひとつは、〈ヒナミ総力戦〉は中央政府が主導で発動した作戦とする事。

もうひとつは、サクヤヒメやアヤカの存在を告ぐ、作戦中に起きた一切を他言無用とする事。

一方、〈ヒナミ総力戦〉発動中に行方を晦ましたカナコ・T・シングウジは、拉致同然に連れ去った橘アサトと共にいた。彼女は記憶を取り戻し、代償としてサクヤヒメから与えられた面によって情緒不安定な状態を強いられていたが、アサトはそんなカナコを妹と認め、受け止めるのだった。

※登場人物紹介は[こちら](#)

ゾイカルやみひめ -結-

キリエ・ソウマは幼い頃から神話が好きだった。

女兒向けの変身ヒロインアニメや、男児向けの特撮ヒーロー番組より、神代の英雄譚に憧れた。人知を超えた神や魔物の強さに惹かれ、その世界観に魅せられた。特に地球から伝わったものがお気に入り、『北欧神話』は彼女にとって聖典であった。

《機獣少女》を屈指したのも、神話の世界に憧れていた事だった。《カタストロ》という異形と戦う少女達の姿は、まさに現代の戦乙女であったからだ。

幼き日の憧憬は成長しても失われず、むしろ大きくなっていき、ついに運命の日を迎える。小学六年生の頃に受けた定期検査で、《機獣少女》の適性を認められたのだ。

問題なく訓練課程を終え、斯くして彼女は《機獣少女》となった。相棒であるMBデバイスに《オーデイン》の名を与え、MBジャケットはドレスに甲冑を組み合わせた女騎士のイメージのデザインを選択し、更に独自のカスタマイズを徹底的に加えた。多くの《機獣少女》達が可愛らしいアイドル路線のデザインを選ぶ傾向にあるため、キリエの衣装は結果的に注目を浴び、そのキャラクターもあつて局所的な人気を獲得していった。

キリエがデビューして一年が経った頃、彼女は中学生になっていた。自分用のパソコンを与えられ、まず最初に思いついたのがネットワーク上で自分の評価を調べる行為——いわゆるエゴサーチだった。結果は『アイドルっぽくないのが新鮮で良い』『姫騎士キリエたん可愛いよハアハア』『拙者も《オーデイン》の鯖にされたいでござる』等々、やはり局所的ではあるが彼女の存在は人気を博し、一部の層から熱烈な支持を得ていた。

結果に気を良くしエゴサーチを続けると、匿名で書き込みが出来る掲示板サイトが目にとまった。テーマに沿った自分の意見などを入力し、それに他者が返信する形で自分の意見を書き、また別の人間が返信を続けていくスタンダードなスレッド形式である。スレッドのタイトルには『ここ一年くらいにデビューした新人で推しを語るスレ』とあり、そこそこ賑わっているように書き込みの数は多かった。《機獣少女》の数は多く、テレビや雑誌などの有名な媒体で取り上げられるのはほんの一握りであるため、スレッドに挙がっている名前は知らないものばかりだった。新人という条件なので当然だが、改めてキリエは《機獣少女》の数と、その中で有名になる事の難しさを感じた。

知らない名前ばかりで眠気を感じつつもスレッドを読み進めていくと、見覚えのある画像にハットとなった——MBジャケット姿で馬上槍形態の《オーデイン》を持って仁王立ちしているキリエの画像だ。空いている左手は腰に当て、勝気な笑みを浮かべている。明るい茶色の髪は当時から長く、切れ長の薄緑の瞳は自信に満ち溢れている。中学に上がったすぐの頃の画像だ。まだ多分に幼さがあるため、生意気というよりは微笑ましい。

まだ投稿されたばかりらしく、ほぼリアルタイムで最新のスレッドに追いつく事が出来た。

サー・イトウ〈俺の推し〉

ちくわぶ〈誰？ 名前キボンヌ〉

一匹狼〈知ってる。キリエ・ソウマっていう可愛いけどイタイ奴w〉

サー・イトウ〈キリエさんの悪口は許さない！ イタ可愛いのが良いんだ！〉

一匹狼〈ロリコン乙ww〉

ギャランドウ〈俺も知ってる。新人だとかかなり有名。可愛いけどイタイ〉

閣下〈お前も蠟人形ろうじやうにしてやろうか！〉

匿名〈通報しますた〉

匿名〈荒らしは放置〉

ちくわぶ〈キリエたん可愛いよキリエたん〉

サー・イトウ〈同志よ！〉

一匹狼〈テラワロス〉

モラル〈しつこい煽りあおはマナー違反〉

匿名〈そういうのも放置〉

サー・イトウというハンドルネームの最初の書き込みにはキリエの画像と共にリンクが貼っており、クリックすると先の画像付きのページが表示された。少し前に取材を受けた、小さなネットニュースの記事だ。新人だとかこういった画像を探すのも一苦労なため、これまでは名前が羅列されるだけだったが、閲覧者が視覚情報ビジュアルを共有する事でスレッドにコミュニケーションが生まれていた。イタイという評価が気になったが、可愛いとか有名と言われるのは満更でもなかった。判らない単語や独特の言い回しが気になったが、いわゆるネットスラングというものだろう。

〈可愛い〉〈でもイタイ〉〈イタ可愛い〉の文字が繰り返されると、新たな返信レスがリンク付きで投稿された。

モルゲッソヨ〈おまいらこれ見ろ〉

ちくわぶ〈くぁwせぢぢぢぢ〉

ギャランドウ〈この娘も新人だとかかなり有名〉

汎用人型決戦兵器〈バスター・マシン〉、キター——ッ！

ウクレレ侍〈なにこれ、CGじゃないの?〉

スレッドに衝撃が走った。リンク先は動画で、キリエと同一年くらいの少女が映っていた。〈機獣少女〉としか思えないが、その姿はメカメカしく、まるでロボットアニメのようだった。腕輪のような装備を飛ばしてぶつけたり、膝のドリルで蹴り上げたり、光線のようなものを発射したりと、とにかく派手だ。なぜか、いちいち武器名——だろう、多分——を叫んでおり、やかましい事この上ない。動画の説明文によると、少女の名前はミズキ・オイカワ。新人としては異例の『二つ名』持ちで、〈バスター・マシン〉と呼ばれているらしい。

スレッドはこれまでになく盛り上がっていたが、キリエは動画のメインであるミズキよりも、彼女のついでに映っていた剣道着のような衣装の少女に目を奪われていた。ひどく静謐で、この動画の衝撃度からすれば気付かない方が普通だろう。実際、動画の投稿者も見切れている少女に気付かなかったのではないだろうか。

グングニル〈さっきの動画に映ってた剣道着の女の子の情報求む〉

咄嗟に思いついたハンドルネームを使い、キリエはスレッドに書き込んでいた。今思えば匿名でも構わなかったのだが、使ってみたくなくなったのだ。

ポチヨムキン〈そんなの映ってた?〉

一匹狼〈ググレカス〉

焼き土下座〈確認した! すげえ美少女いる!〉

ちくわぶ〈本当だ! キリエたんより可愛いお!〉

サー・イトウ〈変わり身早!? でも、確かに……〉

動画を再確認してくれたらしく、件の少女の話題が盛り上がる。とりあえず『ちくわぶ』と『サー・イトウ』には筆筒の角で小指をぶつける程度の不幸になれと念を送りつつ、スレッドの流れを追う。

匿名〈見た事ある。たしかミズキ・オイカワと同じ事務所のはず〉

★墮天★〈カナコ・T・シングウジ。オオミヤ・シテイに住んでる〉

一匹狼〈ストーリーカー乙〉

★墮天★〈近所に住んでるから知ってるだけ〉

モラル〈一匹狼、さつきから目障り〉

匿名〈相手にするな〉

匿名〈同感〉

一匹狼〈ウケるwww〉

荒れ始めたスレッドを閉じ、『カナコ・T・シングウジ』で検索をかける。ヒット件数は少ないが、新人である事を思えば多い方だ。むしろ、キリエより多い。

カナコはキリエと同じ中学一年生で、デビュー時期もほぼ同じ。所属事務所は〈オフィス・タカマガハラ〉。カタナ型タイプのMBデバイスを構える様子は、長い黒髪と剣道着の組み合わせもあり、惑星・地球の『ニホン』を源流とする『サムライ』を想起させる。

知れば知るほど気になった。その容姿と強さに憧れた。

その感情は片思いに近かったかもしれない。

それから数ヶ月後、キリエはカナコと実際に顔を合わせる事となる。一年に一度行われる、〈機獣少女〉の祭典——その会場での事だ。

その頃にはカナコの存在は知れ渡り、〈戦姫〉の二つ名で呼ばれるまでとなっていた。それも当然だろう。それだけカナコは美しく、強かった。自己主張などしなくとも、〈機獣少女〉を続けていれば嫌でも人目に留まる。かつてキリエが、動画の片隅に映っていた彼女の存在に気付いたように。

その数ヶ月間、キリエはカナコを目標に努力した。何時か彼女と並び立ちたい。自分の存在を意識させたい。初めてのテレビ出演では名指しでライブ宣言までした。結果、カナコほどではないにせよ、頻繁ひんぱんに取材を受ける程度にはキリエの人気も上がっていた。だから、きつとカナコも多少はキリエを意識している。そうでなくとも、存在は認識してはいるはず。

そう確信していたのだが——

「初めまして、シングウジさん。キリエ・ソウマです」

「……誰？」

初対面での挨拶あいさつの際、必要ないとは思いつつ自己紹介をしたキリエに、カナコはやや警戒した様子でそう答えた。

「……………え？ 私の事、知らない？」

「有名人だったらごめんなさい。私、テレビとかあまり観ないから」

「……………」

まるで認識されていなかった事に絶句した。無表情で淡々と返すカナコの様子に悪意はなく、それが余計にショックだった。

「——カナコ！」

キリエが失意の底に沈んでいると、横からカナコに声をかける者がいた。彼女と同じ事務所に所属している《機獣少女》のミズキ・オイカワだ。顔を合わせるのは初めてだが、彼女の事もよくチェックしているので間違いない。

「ミズキ、遅いわ」

「ごめんごめん。録画してたの観てたら、新展開で夢中になっちゃって」

「またアニメ？ 好きね」

「ようやく侵略者のラスボスを倒したと思ったら、現れる新たな敵！ 主人公のロボはまるで歯が立たなくて、本部もやられちゃって絶体絶命！ そこに現れた謎の戦艦ロボがめちゃくちゃ強くてね……っ!!」

「……………移動しながらでいい？」

「あ、そうだね。えへへ……あれ？ たしか、キリエ・ソウマさんだよね？」

立ち尽くしていたキリエの存在に気付いたらしく、ミズキが声をかけてきた。ひよっとしたら地下アイドルくらいの知名度しかないのかもしれないと失いかけていた自信を、少しだけ取り戻せた。

「知ってるの？」

「同業者のカナコが知らない方がびっくりだよ。二つ名もあって、えっと……《ロンゴミニアド》！」

「ニアド！」

「《グングニル》よー！」

落ち込んでいたのも忘れ、ミズキの間違いに全力で突っ込んだ。もともと、カナコの《戦姫》やミズキの《バスター・マシン》と違い、キリエの《グングニル》は自分発信の二つ名であるため、定着していないのは仕方がない。

「覚えてなさいよ……ッ!？」

自分でも驚くほどの、お約束の捨て台詞。本当に悔しい時、人間は語彙力を失うのだと、半泣きになりつつキリエは思った。

久々に見た。中学生の頃の忌まわしい記憶だ。トラウマとでもいうのか、年に数回は同じ夢を見る。

「……………?」

キリエが瞼まぶたを開くと、見慣れぬ天井が見えた。視界を巡らすと何も無い、白一色の病室のような部屋。

身を起こそうとして——出来ない。見れば、数本の分厚いぶあつベルトによってベッドに固定されている。まるでドラマの凶悪犯が拘束されている場面シーンのようだ。

「——ッ!？」

『まるで』ではない。凶悪犯として拘束されるだけの事をしたではないか。改めて部屋を見渡せば、天井の角に二ヶ所、カメラらしきものが設置されている。隠す気がないというより、『監視しているぞ』という示威しゐ的なものかもしれない。

「……………」

今思えば、どうかしていた。与えられた力おほに溺れ、人を傷付け——

「……………」

悍ましい記憶が蘇よみがえる。人間を超えた力の代償として、人間の心と形を失いかけた。強制された訳でなく、自分の意思で行った事だが、なぜか当時の記憶は他人事のように感じてしまう。眠っている間に別人格が目覚めていたかのような……。

無論、そんなのは責任転嫁だと判っている。戦っている間も意識はあった。やめようと思えば、やめられた。だが、出来なかった。溢あふれ出る攻撃衝動が抑えられなかった。

(なんで、こんな事に……)

事の発端は「L・C・ファクトリー」にMBデバイスのチェックに行った日、カナコとツバキ——他にも見慣れない顔ぶれが数名いたが——に鉢合はちあわせした事だ。気になって後をつけると、先のメンバーで実戦さながらの模擬戦を行っていた。その後、談話室に移動した一同の会話を盗み聞きし、翌日には『封鎖区域』へ向かうトレーラーに密航した。状況をきちんと把握はあく出来なかつたため、カナコが乗り込まなかつたのは誤算だった。結局、到着前に見つかり、《獅子王》シシオウ アイナ・ボーグマンに正座で説教を聞かされ続ける羽目になったが、問題はその後だ。目的地にあった三角形の不思議な巨大施設——その調査に入る前に起きた地割れに巻き込まれ、キリエは落下。魔女のような格好をした二人も同様に落ちたはずだが、詳細は知らない。ともあれ、MBジャケットを展開する間もなく落着し、キリエは全身を強く打った。ヤバいと思った。これは死ぬなど、妙に冷静だった。

その時だ、『声』が聞こえたのは。

(……嗚呼。あれは悪魔の声だったのね)

人の心に付け込むのが悪魔であるなら、あれは間違いなく、その類だ。

生きたいか？——そう問われて、あの状況で他に選択肢などあるはずがない。あくまで選択したのは人間、自分達は願いを叶えてやっただけ。それが悪魔のやり方なのだ。

(……結局は自分のせいか——)

声に答えて、気付いた時には何事もなかったかのように無傷だった。その上、途轍もない力を自分の中に感じた。臍気に憶えているのは、『預かっておいてくれ』という悪魔の声。それが死にたくないという願いを叶える対価だった。預けられた『なにか』が強い力を与え、その力を振るえとキリエに囁く。

そうして彼女の理性は飲み込まれた。

サクヤヒメとなる前の——まだ「ステインガー」と呼ばれる機獣だった頃の古代種の、次元的に圧縮されたコアの片割れを身に宿して。

第三十七話

裏返ってしまったオモイ

人工の光が途絶え、今やゴーストタウンと化したヒナミ・シティを、二つの紅い月だけが妖しく照らす。周囲には夥しい数の〈ステインガー〉の幼体の残骸と、それらとの戦闘に巻き込まれた車両や建造物の成れの果てが散らばっている。その中心で戦っているのは二人の少女——いや、〈機獣少女〉だった。

片や蒼いシヨートヘアの双剣使い。

片や茶色のロングヘアの槍使い。

〈ヒナミ総力戦〉の中核メンバーの一人、〈獅子王〉アйна・ボークマンと、彼女も同行していた〈ステインガー〉の封印施設調査の際に行方知れずとなったキリエ・ソウマだ。

本作戦におけるアйнаの役割は遊撃——街の各所に散らばっている〈ステインガー〉の幼体群を集結させないよう陽動、可能であれば殲滅する事にある。其処にキリエが唐突に現れ、敵対行動をとった。

「あつはは！」

戦場に似つかわしくない哄笑を上げ、キリエが得物である馬上槍を振り抜く。槍は突くものと思われがちだが、その長さを活かし、時に振り下ろし、時に薙ぎ払ったりと、変幻自在な攻撃を可能とする。しかしそれは、細長い持ち手の先端に刃が付いた種類の場合だ。キリエの使うそれは自身の身長を超え、四分の三が円錐状の攻撃部分を形成する重装備——本来なら易々と振り回す事など出来ない。機力によって身体機能が強化されていたとしてもだ。

「っー」

馬上槍の袈裟斬りという重い一撃に対し、アйнаは距離を取るところか踏み込んだ。髪の毛が数本宙に舞うギリギリで躲し、キリエの懐に入ると——

「……………何のつもり？」

浮かべていた薄ら笑いを引つ込め、つまらなそうに訊ねるキリエ。その喉元には金色の刃が二本、突き付けられていた。形状は武器として最適化された出刃包丁に近い。アйнаの使うレーザー・ブレード〈ベリエル〉である。レーザーといってもクラウ・P・プランやライカ・ユズキなどが装備しているような光学兵器ではなく、実体の刀身を振動させ対象の分子結合を破壊する。

「見ての通りだ。おとなしく投降しろ」

「嫌だって言ったら？」

「警告はした。従わないなら——斬る」

「あは！ 怖い」

キリエの表情に緩んだ笑みが戻る。ハッターだと高を括っているのではない——そう

感じたアイナは咄嗟にキリエから距離を取った。直後、先ほどまでアイナが立っていた地面に何か突き刺さる。太く、多関節で、機械的な意匠のそれは、キリエに繋がっており、自力で先端を地面から抜くと、蛇のように鎌首をもたげた。

それは印象としては明らかに尻尾だ。それも、この作戦の殲滅対象である（ステインガー）のものと酷似している。

「あは。さすがね（獅子王）。トップクラスの二つ名持ちは伊達じゃない……つぶ、ふつぶ……あつははは！」

何が可笑しいのか、緩んだ笑みを浮かべ、哄笑を上げるキリエ。元々、性格に難のある娘だったが、ここまで狂気じみてはいなかったはずだ。身体の異変も含め、彼女に何かあったというのか……。

「良いわ！ 良い！ すごく良い！ あんたを殺れば私の名前にも箔が付くわよねえ……ッ!?」

目を血走らせ、キリエが姿勢を低くする。得物の馬上槍を腋で固定し、半身で構える。突撃が来る——と、迎撃の心構えをした時だ。

「っ!?」  
突如キリエに殺到するカタナの群れ。バックステップを踏んだ彼女の回避線上に数本のカタナが突き刺さり、躲しきれなかった数本は馬上槍で薙ぎ払われた。

「があっ……っ!?」  
いや、一本だけ迎撃を掻い潜っていたらしい。装飾のない実用性一点張りのカタナが、キリエの左腕の付け根に深々と突き刺さっている。

「（エイエル）——!」  
『ロケットブースター、点火』

アイナの意図を察したMBデバイスが、腰部に装備されたロケットブースターを作動させる。カタナに続き、苦悶するキリエに迫る存在に気付いたのだ。彼女は一瞬で間合いを詰めると、すれ違い様にキリエの尻尾を切断。返す刀で背中にも強烈な振り下ろしの一撃を加えた。唐竹割りだ。強固なドレスアーマーであっても、衝撃は殺しきれないだろう。

「おおおお——ッ!」  
ロケットブースターによる加速で、アイナもキリエの懐に飛び込む。苦し紛れに振り回された馬上槍を二本のレーザー・ブレードで叩き落とし、装甲の薄い横腹に体重を乗せた中段蹴りを決める。

「かつは……っ!?」

同時に数ヶ所の痛みに襲われ——機械に見える尻尾に痛覚があるかは不明だが——キリ

エは悶絶しながら倒れた。左腕に刺さったままのカタナが痛々しい。

「助かったぞ、シングウジ」

「どういたしまして」

誇るでもなく、かといつてぶつきらぼうな訳でもなく、加勢に現れた人物は淡々と答えた。

カナコ・T・シングウジ。

彼女は〈ヒナミ総力戦〉におけるアイナのペアで、残っていた〈ステインガー〉の幼体の相手をしていただけだが、それが終わって加勢してくれたらしい。ちなみに、先のカタナの雨もカナコの技だ。機力を編んでカタナとして投擲する飛び道具。カタナに見えるのは、込められたイメージによるもので、実際には物質化したエネルギーの塊らしい。

「――」

呻くキリエを冷たく見下ろすカナコ。キリエが彼女に並々ならぬ執着を持っているのは傍目に見ても判るが、カナコはどののだろうか。アイナはふと、そんな事を思った。

「どうするの？」

訊ねたカナコに内心でほっとする。そんな事はないと思うが、問答無用でトドメを刺せうとする可能性を否定しきれなかったのだ。

「ソウマ――」

「話す事なんてないわよ」

警戒はしたままアイナが問いかけると、キリエは皮肉な薄ら笑いを浮かべ拒絶した。虚勢か、それとも切り札があるのかは判りかねたが。

「――すまない」

「……………はあ？」

謝罪の意図がつかめなかったのか、キリエの表情から薄ら笑いが消えた。

「お前に何があったかは知らないが、連れて帰ってやれなかった私にも責任がある」

キリエは密航者だった。勝手についてきて、不慮の事態で行方知れずとなり、当時のアイナとルイゼに安否確認をする余裕はなかった。緊急避難に照らし合わせても、アイナに非はない。

「なにそれ……………はっ、お優しいこと。悪いと思ってるなら死んでよ！ 私のために、此処で殺されてよ！ 出来る？ 出来ないわよねえ!？」

「あんた……………」

さすがに思うところがあったのか、珍しく感情的になりそうだったカナコを片手で制す。だが、何時までもこうしてはられない。作戦は進行中で、余所では別のペアも戦っている。

る。戦力はギリギリなため、可能であれば加勢に回りたい。

「我々とはある作戦のため此処ここにいる。動けるようなら同行しろ。無理なら動かずじっとしている。後で迎えに来る」

この一帯なら下手に動かなければ安全だろう。カナコは何か言いたげだったが、ここは気付かなかった事にさせてもらう。逃げる可能性が高いが、今は《ヒナミ総力戦》が最優先だ。これ以上の邪魔さえしなければいい。

「あのさあ——」

倒れたままのキリエが無表情に此方こちらを見上げている。

「そういうの……本ほんっ当とムカつくのよねえ——ッ!？」

ざりと奥歯を噛みしめながら、忌々いまいましそうに表情を歪ゆがめ、キリエは激昂げききやうした。直後に地面が光り、閃光はしが奔はしった。射線上にいたカナコは咄嗟とつさにその場を離脱し、残ったアイナは予期せぬ方向からの衝撃によって吹っ飛ばされていた。

（再生したのか……!？）

飛ばされながらアイナは、閃光を発射し、彼女を吹っ飛ばしたものの正体を見た。カナコに斬り飛ばされたはずのキリエの尻尾しっぽが元に戻っていたのだ。倒れた姿勢のまま再生させ、気付かれないよう地面に潜らせ閃光を発射し、死角からアイナに叩きつけたのだろう。

不安定な姿勢でなんとか着地するが、先の衝撃でふらつく。立ち上がったキリエが左腕に刺さったままだったカタナを抜くのが見えるが、上手く思考が働かない。キリエが投擲とうてきしたカタナを右のレーザー・ブレードで反射的に弾はじく——が、その一瞬で距離を詰められ、左のレーザー・ブレードで応戦するも手首ごと掴つかまれ、地面に押し倒されてしまった。

「あつはは！ ざまあない！ ざまあないわね、まったく……!!」

「ぐっ……」

「ねえ、どんな気持ち？ 勝った気で情けをかけた相手に逆襲されて、どんな気持ち？ ねえ？ ねえつたら……!？」

ヒステリックな叫びが耳じ打だつ。だがアイナには、その声がキリエの悲鳴のように感じられた。

「ワンパターンなのよお！」

キリエが件くだんの閃光——ルイゼやクラウに実装された荷電粒子砲と同質のものかもしれない——を放つ。射線上ではカナコが投擲したであろう数本のカタナが消し飛ぶのが見えた。だが、ワンパターンと呼ぶには早計だったらしい。

「——っ!？」

飛来したカタナの投擲開始ポイントとは真逆の位置からの斬撃。それをキリエが躲かわせた

のは、本能的な危機感が働いた結果だろう。カナコの一撃は必殺を期したものだ。

「ひっどくい。避けなかつたら死んでたよねえー？」

大きく跳んで距離を稼いだキリエは、着地するなり、おどけた口調でカナコを非難した。

「……………本気なんだ？」

キリエの表情が消える。今日の彼女は普段以上に感情の起伏が激しい。

「本気で殺そうとしたんだ……………もう私の事なんて見限っちゃったのね……………ふっ、はは！」  
笑っていた。

薄緑の瞳から大粒の涙を零しながら、キリエは笑っていた。

情緒不安定なキリエの様子に、カナコは薄ら寒いものを感じた。もはや中二病でなくサ  
イコパスだ。どうすればこの短期間で人間がこころも変わるのか……………。

「警告はした。機会もあげた。それをふいにしたのは誰？」

「正論なんて聞きたくないのよッ！」

駄目だ。言葉が通じない。

アイナが戦えない今、生きたまま無力化するのはカナコだけでは危険性が高すぎる。

キリエはもう救えない。

(……………なに?)

ひとしきり笑うと、キリエは手にしていたレーザー・ブレードを見せつけるように掲げ  
た。アイナのMBデバイス(バイエル)の片割れだ。先の取っ組み合いの際に奪ったのだ  
ろう。彼女はその握り手部分を半ばから押し折ると、赤い宝石のような部品を内部から抜  
き取り——飲み込んだ。

「……………あは」

恍惚とした表情を浮かべたのも束の間、キリエは大きく跳躍し、目立つ動きでその場  
を離れた。追って来いと誘っているかのように。

「……………アイナ、大丈夫？」

しゃがんで地面に押し倒されたアイナを気遣う。キリエを放置する事は出来ないが、そ  
れは彼女も同じだ。見た限り目立った外傷はなく、意識もはっきりしている。すぐに動け  
るようになるだろう。

「私は大丈夫だ。それより、ソウマを追え」

見た目は幼いが、そう感じさせない貫禄のようなものがアイナにはある。一学年とは  
いえ年上だからか、あるいは「機獣少女」としての経験の差からくるものなのか。

「ええ」

〈ビエル〉の事でショックを受けているはずなのに、おくびにも出さない。ならば、カナコが何か言うのは筋違いだ。

「……頼んだ」

その言葉には、キリエを救う事まで含まれているように感じた。なぜ、そこまで彼女に肩入れするのか。そこまで責任を感じる必要があるだろうか。

「……ええ」

カナコには判りかねた。だが、そう答えなければアイナは安心して送り出してくれない気がしたのだ。

この後、キリエはリツとモカに瀕死ひんしの重傷を負わせ、追撃したカナコの目の前で、ルイゼのMBデバイスの片割れも取り込む事となる。紆余曲折うよきよくせつを経て結果的に彼女はオオミヤ・シテイに生還する事となるが、まさか自分が消息不明になるなどは、この時のカナコは知る由よしもなかった。



夢を見た。

敵同士だった蒼き獅子あおししと紅き竜あかが、世界を護るために共闘し、蠍さそりの悪魔を討ち滅ぼす。夢ではあるが絵空事ではない。今はMBデバイスである〈ビエル〉が、機獣だった頃の記憶である。〈獣王〉と呼ばれ、〈クレイジー・アース〉の異名を持つ搭乗者と共に戦場を駆け、最後の瞬間まで戦い抜いた誇り高き――

「……………」

アイナはがばつと身を起こし、周囲を見渡す。こざつぱりとした、病室のような部屋だ。家具は最小限。自分が寝ているベッドと、小型のテレビと冷蔵庫。来客用おほと思しきパイプ椅子いすがあり、腰掛けている人物がきよとんと此方こちらを見つめている。目の前で眠っている人物が、目覚めるなり全力で上半身を起こせば、驚くのも当然だろう。

「父様……？」

「お、おう……相変わらず寝起きが良いな」

きよとんとするアイナに、『父様』と呼ばれた男性は苦笑を浮かべて言った。

灰色の短髪を逆立てた、髭面ひげつらの中年である。枯れた印象はなく、体格はがっしりとしており、どこか少年を思わせる親しみやすさを感じられる。

アーサー・ボークマン。

アイナ・ボークマンの実父である。

「どうして父様が……？」

「娘が入院して見舞いに来ない父親がいるか？」

照れるでもなく、誇る訳でもなく、当然といった様子でアーサーは娘の疑問に答えた。

「私、少し記憶が曖昧で……」

アーサーによると此処は病院で、検査の結果、異状はないとの事だった。

「……そうでした。満足に戦えなくなつて、なんとか歩いて集合地点に行くと、トレーラーが待つていて——」

予め決めておいた、緊急時あるいは作戦終了時の集合場所。其処に辿り着くと、自分達をヒナミ・シティまで送り届けたトレーラーが待機しており、降りてきたロゼット・コダールの姿を見た事までは覚えている。

「ロゼット社長が、気絶するように眠つたお前さんを車内に運んで、病院の手配をしてくれたんだよ。昨夜の事だ」

「そうですか。あの、作戦は——」

「ああ、その前に言わせろ」

アイナの言葉を遮り、アーサーは娘の頭にぽんと手を置いた。

「——おかえり。よく生きて帰った」

「……はい、父様——」

少し気恥しくはあるが、誰も見ていないのだ。アイナは暫し、されるがまま頭を撫でられる幸せを堪能した。

「——オジサマ、良い報せと悪い報せが……アイナっ!？」

扉を叩く音が聞こえ、聞きなれた声の少女が入室した。彼女はアイナの姿を認めると、手にしていた花瓶を投げ、アーサーとの間に割って入り、そのままベッドにダイブした。

この間、約一・五秒——まさに一瞬の出来事である。

「……まったく、お前という奴は」

「だって、嬉しかったんですもの!」

すでに諦観の域に達しているアイナに対し、彼女に覆い被さるように抱きついている紅い髪の少女に悪びれた様子はない。

彼女はルイゼ・ルンシユテッド。長身でスタイルも良かったため、小柄で幼い容姿のアイナとは歳が離れて見えるが、こう見えて同い年の高校三年生だったりする。共にへヒナミ総

力戦に参加し、生き残った戦友であり親友の間柄だ。

「で、ルイゼの嬢ちゃん。良い報せと悪い報せってのは？」

アーサーがやれやれといった様子で言った。彼はルイゼが見舞いに来ていたのを知っていたのだろう。

「良い花瓶かびんが借りられましたわ。後でワタクシが花を生けておきます」

「悪い報せは？」

「お兄様そちらが其方に」

ルイゼの視線を追うと、病室の入口に男性が立っていた。黒髪を短く刈り込んだ、実直そうな雰囲気の青年——ルイゼの兄、リッツ・ルンシュテッドだ。手には先ほどルイゼが放り投げた花瓶を持っていた。落ちる前にキャッチしたのだろう。

「よう、リッツ。アイナの見舞いに来てくれたのか？」

「あんたを連れ戻しに来たんだよ」

「ったく。まだ俺がいなきや満足に仕事もこなせねえのか」

「そういう問題じゃない」

アーサーは小さな会社の社長で、リッツは部下に当たる。砕けた言葉遣いなのは二人が親戚だからで、公の場では違うらしい。プライベートでしか二人を見た事がないので、アイナには想像が出来なかったが。

「しょうがねえな……アイナ、行ってくる」

「騒がせてすまないね。お大事に、アイナちゃん」

「ありがとうございます。父様、いってらっしゃい」

「おう」

「ごきげんよう、お兄様」

「あまり長居はするなよ、ルイゼ」

リッツに従う形で、渋々病室しぶしぶを出て行く父親を見送る。まだ陽ひが高い時間にアーサーがいるので不思議に思っていたが、仕事を抜けて来ていたと判って納得した。

「ところでルイゼ」

「なんですの？」

「何時いつまでこうしているつもりだ」

アイナは未だいまルイゼから寝技に近い状態で抱きつかれたままだ。苦しくはないが、体格差があるため重いし動けない。

「叶うのであれば何時までも」

楽しみに答えるルイゼ。彼女は冗談で言っている訳ではなく、アイナも別に嫌ではない。

それに――

「……………」

ぎゅつと抱き締めてくるルイゼの身体が、わずかに震えているのに気付いてしまった。どれだけ彼女に心配をかけてしまったのかと思うと、甘んじて受け入れるしかない。繰り返すが、別に嫌ではないのだから。

だからアイナは、この状態のまま《ヒナミ総力戦》の結果を訊く事にした。自分が戦線を離脱した後の出来事も含め。



生活音もなく、人の気配も感じられない、とある街の一角。

ラブホテルから連れ立って出て行く男女がいた。年代はどちらも高校生くらいで、まだ陽も高い時間帯という事もあり、目撃する者がいたなら下世話な想像をするよりも不審に感じたのではないだろうか。実際、連れ立って歩く二人に『昨夜はお楽しみでしたね』といった様子はないし、事実、淫らな行為に及んでいた訳でもない。

たちばな

橘 アサトとカナコ・T・シングウジ。

あくまで宿としてラブホテルで一夜を明かしたが、電気が通っていない状況を鑑み、明るいうちに食料を確保しようとして外に出てきたのだが――

「――お迎えに上がりました」

ラブホテルの敷地を出るなり、二人を待つ者がいた。十歳に満たないであろう幼女である。自然に出るはずのない紅い色のショートボブ。クラシックなメイド服を身に纏い、顔には目元を完全に覆い隠す紅い眼鏡。

人気の絶えた街並みに佇む強烈な容姿に、揃ってきよとんとするアサトとカナコに  
対し、紅い髪の幼女は二人が出てきた建物を一瞥すると――

「お楽しみでしたか？」

と、小首を傾げた。自分の発した言葉の意味を理解していないかのように。

## あとがき

どうも、流遠亜沙です。

『ゾイヤミ』第三十七話をお届け致します。

今月も月二ペース、守れました。でも、正直しんどい……なのでアンケートにご協力ください。褒めなくていいし、なんならコメントも要りません。読者がいるという事実を認出来るだけで励みになるので。

自己満足だけじゃ、やってらんねえんだよ！

……忘れてください。でもアンケートは送ってください。お願いします。

よきところで謝辞を。

ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。どの程度の方が『ゾイド』小説の延長として読んでくださっているのか判りませんし、逆に『ゾイド』知らない方は読者にいないかもしれません——『ゾイドワイルド ZERO』超楽しみ！ 無印や『スラゼロ』の加戸監督で、ゾイドはコクピットがあるんですけどよ、奥さん！

まだビーストライガーもキャノンブルも作れてねえぞ……!?

放送が一年として、終わる頃には『ゾイヤミ』も完結してほしいなあ……。

2019 / 8 / 28 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXX 第3部』小説ページに戻る